

31 もう既に始めているところがある！流石だ！だが、もう一つの視点が弱い？！

堂本 彰夫

(1) 新しい学校づくりを推進する渋谷区、「シブヤ未来科」の挑戦

さて、早速であるが、ここでは、先号(30)で紹介した、東京都渋谷区の取り組みについて、詳しく見てみたい！いつものように、パソコンでネット記事を追っていると、とんでもない記事に出くわしたわけであるが、それは、標記のような見出しで始まっていた！以下、引用すると、「東京都渋谷区の区立小中学校では、2024度より探究学習『シブヤ未来科』がスタート。『午後の授業時間を丸ごと探究学習に充てる』という大胆なカリキュラムは、世間を驚かせました。保護者として気になるのは、どのようなカリキュラムなのか、そして、通常の教科学習や進学・受験への影響はないのかということ。…『シブヤ未来科』のコンセプトや概要について、渋谷区では、渋谷区基本構想で掲げる未来像『ちがいを ちからに 変える街。渋谷区』の実現のため、『未来の学校』プロジェクトをハード・ソフトの両面で進めてきました。ハード面では、今後20年間かけて区立小中学校校舎の建て替えを行います。一方、ソフト面で取り組むのが、教育DX、そして探究学習『シブヤ未来科』です。」とある。

続いて、「これからの時代を生きていく子どもたちには、どのような資質・能力が必要かという議論は、国内外で活発に行われてきました。文部科学省の学習指導要領やOECDがまとめたEducation2030 projectでは、自ら問いを見つけ課題を解決する力、対立やジレンマがあるなか他者と協働して新たな価値を生み出す力などが強調されています。こうした背景があったうえで、渋谷区としては、『自ら考え判断して学び続ける自己調整力』『多様な仲間と協働して新たな価値を生み出す創造力』『自分が思い描く未来を実現する挑戦力』の3つを、未来を生きるために必要な力と定めています。これらの力を育むために探究学習・シブヤ未来科をスタートさせました」となっている。

さらには、「探究学習とは、自分が興味・関心のあるテーマについて自ら問いを立て、知識や情報を収集・整理したりアクションを起こしたりしながら深めていく学びのこと。シブヤ未来科では、児童生徒一人ひとりが探究するテーマを自分で決め、「My 探究」に取り組みます。企業や地域の協力による体験学習の機会も多く、探究活動を通して、自己調整力や創造力、挑戦力を育てていきます。昨年度、先駆けて探究学習をスタートさせたモデル校では、ギターがうまくなる方法をひたすら探究する生徒、ダンスに打ち込む生徒など、それぞれが好きなことに取り組む姿が見られました。また、『環境にやさしい未来の学校づくり』をテーマにMy 探究に取り組んだある児童は、資料を調べたり社会科や理科で学んだ知識を活かしたりしながら校舎やエコシステムの要件を整理し、似たテーマの友だちと意見交換をしながら、教育版マイクラフトで理想の学校を表現しました。このように自分の好きを突き詰めることから始めて、最終的には、それらを地域や社会のニーズや困りごとに掛け合わせるような課題設定ができるようになるというと考えています」というような、行政担当者の言も、合わせて載せてあった！

とにかく、私にしてみれば、何とも驚くべき情報であり、一方では、「もう既に始めているところがある！流石だ！」という思いもある！やれば出来るのであり（関係者には、大変失礼な物言いはあるが？）、これからは、もっともっと、こうした取り組みを始める学校（地域/市区町村）が現れて欲しいと思う次第でもある！要は、まさにこの取り組みは、これからの（我が国の）学校のあり方を提示しているということである？！

(2) 教員の働き方改革や不登校対策はどうなっているか？もちろん、いじめ対策も？！

そこで、この取り組みに採り入れられている幾つかの工夫（挑戦？）であるが、まずは、「授業時数特例校制度」の導入である。詳しくは分からないが、それを活用して、「総合的な学習の時間（探求学習）」を倍増させ、それを、「シブヤ未来科」の核としているということである。基本的には、それを午後の授業時間に充て、授業時間数を調整するため、26校ある全区立小中学校で、文部科学省が定める「授業時数特例校制度」の認可を取得し、主要教科（週1時間の教科などを除く教科）の時数を最大1割カットし、学校設定科目等に置き換えるということである。つまり、カットした時数を、その「総合的な学習の時間（探求学習）」にあて、その時間を、「シブヤ未来科」の核としているわけである。

例えば、小学6年生では、学習指導要領に定められた総合的な学習の時間の標準時数は70時間（週2時間）であるが、これを、2倍以上の155時間とし、それに加えて、教科、特別活動、道徳、学校行事の一部などをそれに位置づけ、トータルの時間数を、さらに多くしているということである。主要教科の時数を1割カットした結果、履修範囲が終わらないなどの問題はないのかについては、計画段階では、現場の教員や地域、保護者の間で懸念する声もあったが、教科書の指導内容は、もともと標準時数の9割程度に収まる量になっ

ているため、学習すべき内容は、基本的には授業時間内で押さえられると考えられている。一方で、学年や科目によっては、従来の9割の時間に圧縮するのが難しいものもあり、そこは各学校長の判断のもと工夫されることになっているらしい。例えば、小学5年生の算数のグラフの単元は、探究学習で使う統計の要素を含むので、そこで、単元の一部の発展的な内容を探究基礎として位置付け、総合的な学習の時間で取り扱っている学校もあるということである。

また、中学3年生も、「My 探究 (探求学習)」に取り組むが、高校受験への影響が気になることについては、「探究は独立したものではなく、教科と密接に関わるものであり、受験においてはむしろ好影響がある。…探究と教科とを切り離して考えることはしていません。探究の場で、教科の内容がどのようなシーンで役立つかを実感できれば、教科学習へのモチベーションも上がるでしょう。実際、モデル校を対象にした調査でも、教科学習に対する姿勢に変化が見られた、より意欲的、主体的に取り組むようになったという報告があります。なかには、まだ肌感覚ですが、定期考査の成績が全体として良くなっていると感じるという声もあります。また、昨今の入試は、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力が試されるものによって変わってきています。こうした力は、まさに主体的に取り組む探究を通して育まれる」ともある。

(3) 問題は、そこに、社会教育 (行政) がどう関わっている (くる) かである?!

そして、「これからの時代を生きるための力といっても、なかなかイメージがしづらくもあるでしょう。当初は地域や保護者の皆さんの理解が得られるだろうかという懸念もありました。しかし渋谷区としても、各学校としても、積極的に探究の意義や取り組みについて発信してきたこともあり、一定の理解や支持を得られていると考えています。また、学びに向かう姿勢や非認知能力といった数値化が難しいものについても、振り返り用のアプリケーションを作成し、子どもたちに定期的に回答してもらい効果検証を続けています。これまでに大きな問題やクレームなどはなく、むしろ保護者からはポジティブな反応のほうが多い」。

さらには、「PTAを通して届く保護者の意見・感想で特に多いのが、子どもが自宅で学校の話をするが増えた、という声です。PTAの方々からも、自分たちも子どもたちの学びを応援したい、積極的に関わりたいという力強い声をいただいています。一方で、「連携先の企業や地域の方々は、のべ300あまりに上り、社会全体で子どもを育てるといふ私たちの思いに共感してくださる方が多く、ありがたい限りです」。シブヤ未来科の取り組みについて、全国の自治体からの視察や問い合わせが相次いでいるという渋谷区。最後に、「日本の教育を渋谷区から変えていきたい」と。何と言う視野、考え方なのであろうか!

だが、ここで冷静に受け止めると、この渋谷区の動きは、私が長年唱えてきた、そして近年煮詰めてきた「教育協働」、そこにおける「学校教育の具体的な姿・形」そのものではないか (かの「合校」と同根!)?! 要は、教員の働き方改革 (部活の外部 (地域) 委託等を含む)、CS・地域学校協働本部事業等、これまでも幾多の事業やシステム提案がなされてきたが (そして部分的には、かつても実践されていたが!)、その中で欲しかった (必要だった) のは、学校の教育課程の、言わば抜本的な変更であったわけである (「カリキュラムマネジメント」ということも言われてきたが、授業や時間割の発想自体の転換が必要であったわけである?!) !

すなわち、ここで評価されることは、新たな位置づけがなされたのかもしれないが (→「探求」)、いつのまにか評判が落ちていた (時数も減らされていた)、かの「総合的な学習の時間」を新たに蘇らせ (時数を増やし)、その意義と可能性を、しかも、地域との連携やDXの活用という形で、実現させようとしているということである! ただし、ある意味、まったく新たな戦術を取り出したということではなく、これまでの取り組みの成果 (反省を含む?) を、総体として活かしていこうとするものとも言える (朝令暮改ではない?)?!

ただ、やはりそこには、教職員の労働時間の問題ややり甲斐、納得の問題が残る! ここをクリアしなければ、結局は、元の木阿弥である! だから、じつくりと、腰を据えてやっていくしかない! 言い換えれば、短絡的な評価を下すべきではないということであるが、そこに欲しいのは、地域との連携の強化である! というより、公民館や図書館、博物館、あるいは青少年教育施設との連携・協力の意義と可能性を、もっと前面に出して欲しいということである! こちらがないと、これまでもそうであったが、教職員の負担 (感) の軽減や成果の共有 (感) につながらない! また、社会教育関係者の、一致団結した協力関係も築きにくい (もちろん、そこには、PTAや子ども会等の、社会教育関係団体の新たな協力関係も含まれる!) !

最後に、このように膨らませていけば、何か壮大で、しかも、ある意味昔に戻るような取り組みに見えるかもしれないが、今、必要なのは、そこに、核 (軸) となるしくみ (結節点) を創ること、あるいは新しい時代状況に合うような全体ビジョンを構築することである! 私は、その突破口 (転換点) となるのが、今回の渋谷区のような取り組み、しくみづくりであると思うのである! これまでの隘路や不十分さは、まさに、そこに起因していたと思うのである! ただし、踏み出した直後の忙しさは、当然ある! だが、繰り返すように、それが、納得した忙しさなのかどうかの問題なのである (忙しくない仕事はないのである!) (つづく)